

はがくれ今日談 “図書館に民度を見る”

(2013年11月10日(日) 西日本新聞・佐賀より)

西日本新聞社佐賀総局長 宮原拓也

国や地域を「民度」の高低で表すことがある。教育や文化水準だけでなく行動様式などの成熟度を言う。明治期に来日した欧米の知識人が、高い識字率などから島国・日本の民度に敬服した、という話は数多い。

全国にある公立の図書館は、その地域の特性や民度をうかがえて興味深い。4月から民間委託を始めた武雄市図書館は現在、全国の注目度が最も高い。委託先も話題性十分で、コーヒーの売り場あり、外を見渡せるテラスありで、おしゃれにネーミングすれば「TAKEOブックカフェ」。公立図書館のイメージを大きく変え、集客マシンとして百点満点だ。ただし、既に多くのメディアに取り上げられており、小欄では脇役に回ってもらおう。

ここで注目したいのは武雄のお隣にある伊万里市民図書館だ。18年前の1995年に開館して以来、全国からの視察者が相次ぐ名図書館で、今年は半年で昨年の年間視察者300人を超えている。「武雄のついで、が増えているだけです。」と古瀬義孝館長(64才)は謙遜するが、ここの売りは「民営の武雄」とは逆に非民営化を宣言し「市民が育てる図書館」というコンセプトを掲げていることだ。

米国では地域の図書館を支える「ライブラリー・フレンズ」と呼ばれる友の会組織が一般的である。伊万里はこの手法を採用、開館9年前に小さい子どもを持つ親を中心に150人で組織、今では356人が“おらが図書館”をバックアップする。「図書館フレンズいまり」という組織で、古本市や読み聞かせ、音楽などのイベントを企画、運営する。市からの補助金は一切なく、逆に売り上げを図書館に入れる

“孝行息子”で、これほど活発な友の会組織は九州には他に例がない。

図書館機能でもう一つ重要なのがレファレンス力である。調査や研究のための資料収集などを利用者にアドバイスしたりする補助業務のことで、古瀬館長の自慢は実はここにある。当然、利用者に的確にアドバイスする人材が不可欠となるが、伊万里市民図書館の職員 18 人の中には、18 年勤めるベテランもいる。

この図書館から世界に躍り出た商品も生まれた、というから驚く。2008 年の北海道洞爺湖サミットで、各国首脳にお土産として贈呈され、話題となった「有田焼万年筆」である。もともと、有田焼を入れる化粧箱の製造販売会社である佐賀段ボール商会（有田町）が、有田焼の販売不振に伴い家業も低迷、その活路を見いだして開発したのが、この万年筆だった。

当時は副社長だった同社の石川慶蔵社長（66 才）が伊万里市民図書館に 1 年間通い続け、焼き物や経営戦略などの本をむさぼり読んだ。借りた本は月々 80 冊、年間では千冊に及んだ。9 年前のことになるが、石川社長はこう振り返る。「図書館は世界や日本、現代人や先人たちの知恵や志が集積した宝の山、伊万里の図書館には豊富な量の書籍があった。職員の対応も丁寧で、何冊借りても笑顔で受け答えしてくれた。勉強する雰囲気もいい」

民営か公営かの是非論は別にして、武雄も伊万里も図書館への情熱は熱い。知事や県職員が踊って、ネットで注目されるのと違って、知の宝庫である図書館の評判は、佐賀の財産である。

※転載許可は得ております。